

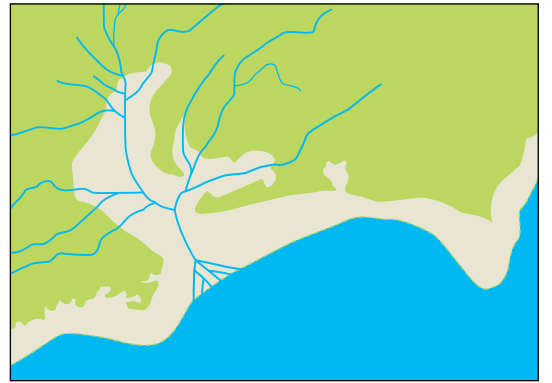
たはら 歴史探訪 クラブ 其の59

TAHARA
History Inquiry
Club

渥美半島に
人が暮らし始めたころ

平成17年2月号で、大久保町宮西遺跡で見つかった旧石器時代の石器についてご紹介しましたが、今回から2回にわたって、もう少し詳しく説明したいと思います。

平成14年に刊行した『愛知県史』（資料編・考古）では、地域の方々がつけて大切に保管された石器の中から、数多くの旧石器時代の石器が見いだされ、渥美半島では後期旧石器時代（約2万年前）から人々が暮らし始めたことがわかりました。



半島に人が暮らし始めた最氷期の地形

旧石器時代の石器は、亀山町の川地遺跡をはじめ、野田町の籠田遺跡野田中学校、山崎遺跡（サンテパルク西）、宮西遺跡で見つかっています。そして、文化の連続性が見られる縄文時代草創期（1万5000年～1万2000年前）を加えると、吉胡遺跡、大久保町の黒河遺跡・佐藤遺跡、野田町の長代遺跡などがあり、渥美半島は、旧石器時代から縄文時代草創期の暮らしが分かる重要な地域となりました。

この時代は今よりも寒く、最も寒かった2万4000年～2万2000年前には、平均気温が5～7度低く、海面は1000mも低かったといわれています。植物

は冷温帯落葉広葉樹林（ブナやミズナラなど。現在は照葉樹林）が、動物はオオノジカやノウマンゾウなど、大形のものが生息していました。渥美半島で人々が暮らし始めたころもこのイメージに近く、想像以上に厳しい気候でした。地形については、三河湾、伊勢湾はなく、河川が流れていた程度で、神島の西沖合に河口があり、海岸線は、はるか南にありました。

さて、このような環境の中、この時代の人々はいったいどのような暮らしをしていたのでしょうか。

人々は、定住せず、動物たちを追い、遊動生活に適した道具類を持ち、季節ごとに移動を続けていたことが想像されます。移動を続けることは、子どもや老人にとっては大きな負担でしたし、食料獲得もそれほど簡単なことではありませんでした。そして旧石器時代の終わりごろになる



縄文時代草創期の原風景画（安田喜憲著「環境考古学事始」より）

と、狩猟に重きを成していた時代から、ドングリなどの植物性食料に比重が変わり、人々は定住を始めたのです。

なお、これらの年代は国立歴史民俗博物館が示した年代で、これまでいわれてきた年代よりも2000年ほど古くなっています。（増山）

文化財課 23局3531